

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 20 日現在

機関番号：22401
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2011～2012
課題番号：23792519
研究課題名（和文） 特別養護老人ホームにおける介護職員と歯科衛生士の口腔ケア連携体に関する研究
研究課題名（英文） A study on the systems of collaboration in oral care between dental hygienists and care
研究代表者 新井 恵（ARAI MEGUMI） 埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教 研究者番号：40331350

## 研究成果の概要（和文）：

特別養護老人ホーム入所者に対し、よりよい口腔ケアを提供するために介護職員と歯科衛生士の連携について検討した。特養で口腔ケアを行っている歯科衛生士に職員との連携等に関する無記名自記式質問紙調査を実施した。

歯科衛生士と介護職員の連携は24.0%の者が不十分であるとした。また、約65%の者が施設に勤務する歯科衛生士の必要性を感じていた。今後、口腔ケア充実のために施設に勤務する歯科衛生士を増加させるための方策について検討したい。

## 研究成果の概要（英文）：

We studied the collaboration between dental hygienists and care staff with the purpose of providing better oral care for people living in special nursing homes for elderly people. An anonymous self-administered questionnaire relating to collaboration with staff was administered to dental hygienists providing oral care at special nursing homes for elderly people.

Collaboration between dental hygienists and care staff was inadequate for 24.0% of the people. About 65% felt that there is a need for dental hygienists to be on duty at their institution. The number of dental hygienists who are on duty at an institution in order to provide ample oral care is expected to increase.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：歯学・社会系歯学

キーワード：口腔ケア 特別養護老人ホーム 歯科衛生士 連携

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 高齢者の oral health promotion の重要性

現在日本は高齢社会となり、今後益々高齢化が進むと予測されている。2000年に、健康寿命の延伸および生活の質の向上を実現することを目的として、健康日本21が

発表された。具体的な目標として栄養・食生活、身体活動・運動などとともに歯の健康が上げられている。

また、2000年に導入された介護保険は、2006年4月に介護予防に重点をおいた予防重視型システムへ転換される改正が行われ、介護予防プランとして、口腔機能向上

の項目が上げられている。このように、口腔保健の推進は国の健康施策として重要な位置を占めている。

欧米では、既に10年以上前から口腔保健分野における oral health promotion の重要性が指摘され、多くの実践・研究が行われてきた。しかし、日本の oral health promotion は着手されたばかりである。高齢化がすすんだ現在、高齢者の oral health promotion は極めて重要な課題である。

## (2) 高齢者の健康と口腔ケア

免疫力の落ちている高齢者では、口腔内が不潔になると誤嚥性肺炎の原因になることが知られている。高齢者の死因の4位が肺炎であり、そのうち約30%は、誤嚥性肺炎であると診断されている。誤嚥性肺炎の割合は、要介護度が重度化するに従い増加傾向にある。

また、要介護高齢者の日常生活における楽しみの第一位は「食事」とであると報告されている。さらに、高齢者の口腔機能改善により、ADL等の生活機能が向上することを示した報告もあり、要介護高齢者のQOLを維持するために口腔ケアは重要な役割を果たしている。

## (3) 介護老人施設における要介護高齢者の口腔ケアの現状と整備の必要性

介護老人施設入居者を対象に、歯科衛生士による口腔ケアを実践した結果、口腔衛生状態の改善、カンジダ菌の減少、要介護者の発熱回数の減少があった等、口腔ケアの成果が報告されている。

これまで、歯科医師や歯科衛生士が専門的に行う口腔ケアに関する研究や報告は多くあるが、日常的に介護老人施設で介護職員が行う口腔ケアに関する調査・研究はほとんど行われておらず、口腔ケアの現状は明らかでない。そこで、平成20年度から平成22年度の文部科学研究費補助金を受けて、「特別養護老人ホームの介護職員が利用者に対して行う口腔ケア技術の向上に関する研究」で介護職員が行っている口腔ケアの現状と口腔ケアを困難にしている要因を明らかにした。研究から得た知見は、介護職員はさまざまな業務で多忙であり、口腔ケアにかかる時間が少ないこと、認知症などにより口腔ケアを拒否された場合の対処方法等をはじめとして、様々な困難を感じていることがわかった。また、歯科医師や歯科衛生士から口腔ケアのアドバイスを求めている現状が明らかとなった。

## 2. 研究の目的

特別養護老人ホームに入所している高齢者の口腔ケアを実施している介護職員と歯科衛生士の連携体制の状況と課題について明らかにし、よりよい連携体制について検討することを目的とする。

## 3. 研究の方法

インターネットサイトWAM NET(独立行政法人福祉医療機構運営)に掲載されている埼玉県内261施設の特別養護老人ホーム(以下特養)の施設長261名及び専門的口腔ケアを行っている歯科衛生士約300名を対象とし、特養入所者への口腔ケアの実施状況や、介護職員と歯科衛生士の連携状況等に関する無記名自記式質問紙調査を行う。

口腔ケアの連携を困難にしている要因を入所高齢者、施設、介護職員、歯科衛生士の問題に分けて分析し、歯科衛生士と介護職員との効果的な連携について検討する。

## 4. 研究成果

37名の歯科衛生士から回答(回収率14.2%)を得た。

### (1) 勤務形態(図1)

歯科医院に常勤14名(37.8%)、歯科医院に非常勤4名(%)、歯科衛生士会にのみ所属1名(2.7%)、特別養護老人ホームに常勤2名(5.4%)と続いた。特養との関わりは、勤務先の訪問歯科20名(54.1%)、歯科医師会のモデル事業に参加1名(2.7%)、訪問歯科サポート業1名(2.7%)、歯科医師会の訪問歯科に同行1名(2.7%)、歯科衛生士資格のある看護師として勤務1名(2.7%)、併設特養の病院歯科に勤務1名(2.7%)等であった。

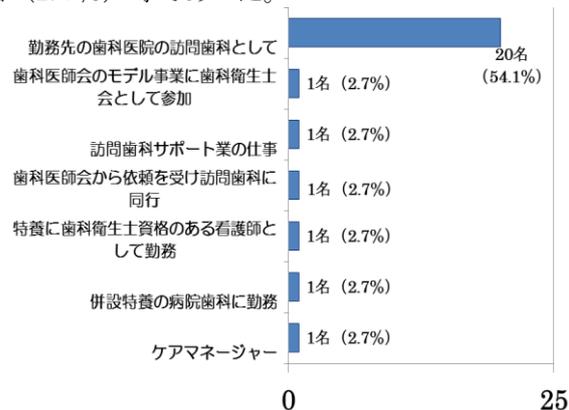


図1勤務形態

### (2) 口腔ケアの実施(図2)

口腔ケア実施者は、歯科医師平均1.38名(±0.82名)、歯科衛生士は2.11名(±1.67名)であった。他にはコーディネーター8名、歯科助

手6名が関わっていた。施設の窓口は、看護師が15名（40.5%）、介護士9名（24.3%）、相談員6名（16.2%）等であった。

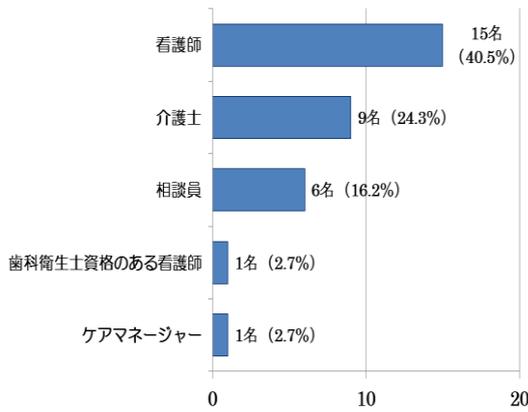


図2施設窓口担当者

(3) 施設滞在時間 (図3、図4、図5)

口腔ケアを行うために特養に滞在する時間は、2.67時間（±1.78時間）であった。口腔ケア実施人数の平均は24.6人（±23.3人）であった。口腔ケアの頻度は、ほとんど差はなかったが、口腔ケアを実施する人数および時間は施設間で大きな差があった。

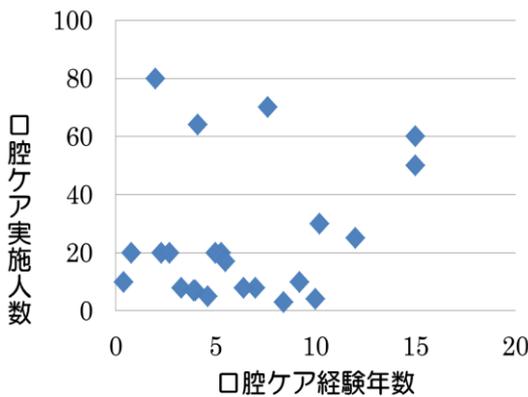


図3実施人数と経験年数

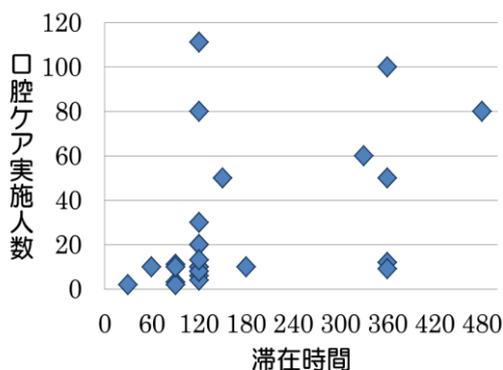


図4実施人数と滞在時間

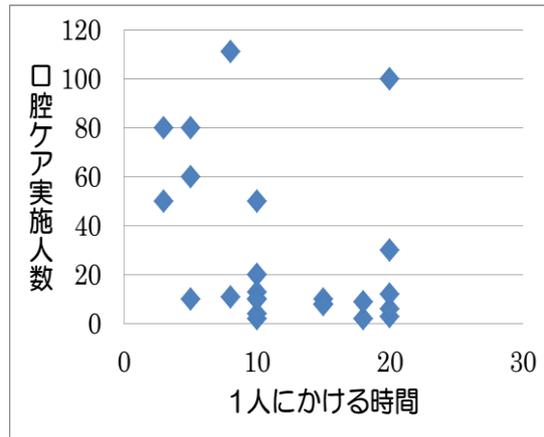


図5実施人数と1人にかかる時間

(4) 問題対処行動

入所者の方の口腔内に問題を見つけた場合の対処方法は、歯科医師に報告すると回答した者が最も多く20名（32.3%）であった。次いで、看護師に報告するが16名（25.8%）、介護職員に報告する12名（19.4%）と続いていた。歯科衛生士は口腔ケアを実施すると共に、口腔内に問題を抱えた入所高齢者の方を早期に発見し、治療につなげていく役割を担っていると考えられた。

(5) 歯科衛生士と介護職員の連携

歯科衛生士と介護職員の連携は十分であるかについては、十分であるが8名（32.0%）、十分でないが6名（24.0%）、どちらもいえないが11名（44.0%）であった。十分であるとした理由として、ケア前後に連絡事項の確認をしている、問題ごとに報告している、があげられた。十分でないでは、介護職員で協力的とそうでない人がいる、思いがうまく伝わらない、基礎知識に差がある、月1回の合同会議では急な問題の時に対応が遅れるがあげられた。どちらもいえないでは、忙しそうでコミュニケーションが取れない、介護職員にではなく看護師を通して伝達している、交代勤務で様々な高齢者がいるので口腔内の状況の把握が難しい、勉強会や意見交換会がない、週に1回の訪問なので伝わらない、などがあげられた。歯科衛生士が口腔ケアを実施するために施設を訪問するのは、平均約1週間に1回程度、滞在時間は約2時間半と短いことから、介護職員と効果的なコミュニケーションが取れない現状があると考えられた。また、介護職員は交代勤務であることから、歯科衛生士がアドバイスした口腔ケア方法が伝達、共有しにくいことも連携を阻んでいる一因であると考えられた。

(6) 口腔ケア技術向上の方法

介護職員の口腔ケア技術向上の方法については、介護職員と歯科衛生士で定期的な連絡会議を持つ16名(37.2%)、勉強会の開催11名(25.6%)、個別指導をする10名(23.3%)の順に多かった。

連絡会議や勉強会の開催など、共通認識を持つ場を必要としていることが明らかになった。

(7) 施設に勤務する歯科衛生士の必要性  
施設に勤務する歯科衛生士が必要だと思うかについては、常勤で必要が3名(11.5%)、非常勤で必要が14名(53.8%)であった。必要でないと回答したのは7名(26.9%)であった。約65%の者が、施設に勤務する歯科衛生士の必要性を感じていた。入所者に口腔ケアを直接提供する機会が増えること、介護職員や看護師と連携が取りやすくなる等、口腔ケアの充実のために今後施設に勤務する歯科衛生士が増加させるための方策について検討したい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

- ① 新井 恵，特別養護老人ホームにおける介護職員と歯科衛生士の口腔ケア連携体制に関する研究，日本歯科衛生学会第8回学術大会，2013年9月14日～16日，神戸市
- ② 新井 恵，特別養護老人ホームで歯科衛生士が行う口腔ケアの基礎的調査，日本歯科衛生学会第7回学術大会，2012年9月15日～17日，盛岡市

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

新井 恵 (ARAI MEGUMI)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教  
研究者番号：40331350